# 双頭の蛇

西村寿行

NISHIMURA
HARD-ROMAN SERIES

NISHIMURA HARD-ROMAN SERIES

双頭の蛇　西村寿行選集2

著　者　西村寿行　©1977
発行者　徳間康快
発行所　徳間書店　東京都港区新橋四―一〇　郵便番号一〇五
電話四三三・六二三一　振替東京四―四四三九二
カバー装幀　矢島高光　装画　横山明　本文挿画　小松久子
77K20b

双頭の蛇
昭和52年11月10日　初刷
昭和53年3月25日　7刷
著者　西村寿行
発行者　徳間康快
発行所　徳間書店
東京都港区新橋4―10　郵便番号105
電話(03)433・6231
本文印刷　㈱清水印刷所
カバー印刷　真生印刷㈱

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

2

# 双頭の蛇

西村寿行

徳間書店

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

狂った夏——7
まぼろしの川——63
双頭の蛇——113
荒野の女——155
呪術師たち——191
掲載誌一覧　233

# 狂った夏

# 1

茅野町幹部派出所勤務の妹背吉数巡査が姿を消したのは、七月十四日の午後十一時であった。

例年になく、暑い夏だった。

蓼科高原に近い茅野町は、標高はあるものの、この年の暑さは異様であった。高原全体に熱風が停滞している感じがした。その日の正午、麓の諏訪市測候所では三十六・五度を記録していた。

風は、どんよりとした大気の中に閉じこめられて動かなかった。

妹背巡査は午後七時に幹部派出所を出た。自転車による受け持ち区域の巡回であった。

翌七月十五日——。

人口一万弱の茅野町にとって、この日は特別の意味を持っていた。悪神と善神が町に降臨を告げる日だった。

幹部派出所には、石岡警部以下二十七名の警官が配属されていた。七月十五日がやってくると、町に異様な昂奮がただよいはじめる。その昂奮は警官にも取り憑く。湯量が貧弱になって年々さびれていく温泉町である茅野町のひとびとの目に、それまでは消えていた光が戻る。熱病の病原菌が取り憑き、それが潜伏しているような妖しさが、宿るのだった。

石岡警部が特別警戒態勢を布いたのは、昨夜からであった。その警戒態勢は一カ月間、正確には三十五日間、つづけられる。三十二日間は前夜といえた。最後の三日間が問題だった。その三日間に向かって狂気が昂まり、狂乱が絞りこまれてゆく。

妹背巡査は夜の七時に幹部派出所を出た。九時に派出所に帰る予定になっていた。帰って、上司に巡回報告をして、その夜はそれで明け番になることになっていた。

午後十時になっても妹背巡査は戻らなかった。それまでは、だれも、たいして心配していなかった。妹背



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

巡査はまだ二十二歳になったばかりで正義感の強い、几帳面な性格だった。時間にも正確であった。だが、茅野町は山峡にあるさびれかけた温泉町だ。これまで凶悪犯罪の起きたことがなかった。ときに酔っぱらいがたあいのない喧嘩をするくらいだった。妹背巡査がどうかなったなどとは、だれも思わなかった。それに、妹背巡査はこの茅野町が生まれ故郷であった。町の背後の山に戦場ガ原がある。そこへ行く途中に生家があった。生家は農家で、兄の妹背吉成が継いでいる。生家か、友人のところに寄っているのだろうと、考えられた。

十時を過ぎると、さすがに心配になった。

上司が生家の妹背吉成に電話を入れてみた。妹背巡査は来ていないとの返事だった。

十一時になって、妹背巡査の失踪はほぼ確定的だとの見方が強まった。二時間も派出所に戻らないのは、おかしかった。何かがあったのだとしても、電話はしよう。

石岡警部は、連絡を受けて、全警官に捜索を命じた。さして広い町ではない。警官たちはそれぞれのテリトリーを妹背巡査の情報を求めて歩いた。

二台あるパトカーも出動した。

朝になったが、妹背巡査は戻らなかった。情報も皆無だった。妹背巡査の乗って出た自転車も発見されなかった。

七月十五日、朝。

妹背吉成は石岡警部の訪問を受けた。

弟が失踪したらしいことを、きかされた。

「何か、心当たりがありませんか」

石岡は妹背に訊いた。

妹背吉成は変人だとの風評があった。老父母が七年前にあいついで死亡していた。子供は、警官になった吉数と吉成の二人だけだった。妹背吉成は三十二歳になる。父母が病死してからは妹背が弟の面倒をみた。父母替わりだった。

どういうわけか、妹背は結婚しようとしなかった。もっとも、かんたんには結婚相手がいないという事情もあった。人口一万弱の町ではあるが、娘がまるでいないというわけではない。だが、娘たちは農家に嫁ぐことをいやがった。土まみれになって朝から晩まで働くのは、だれにしろ、歓迎はしない。牛、豚、鶏の世話もある。

妹背は同じ町の農家の娘である双葉英子と恋をしていた。五年前である。結婚にゴールインするかと思われたが、英子が、結局、妹背を捨てた。恋はしても、嫁に行くのは、別だった。

酒店を経営している篠山広士の嫁におさまった。

妹背は寡黙な男になった。

もともと、妹背は陰鬱なものを性格に秘めていた。諏訪農業高校を出ていた。最初から農業経営をめざしたのである。それも、大農家ならともかく、生活するのがギリギリの耕作地しか持たない農家の長男だった。ふつうの男なら、都市生活を希むはずであった。そこらあたりにも、性格が何か翳りを帯びたところがあった。社会に溶け込むことがきらいなような気配があった。

英子に捨てられてから、妹背は結婚には積極的にならなかった。五頭の乳牛を飼い、鶏を三百羽ばかり飼って、ひっそりと暮らしていた。会合や、そういうことにはめったに顔を出さなかった。

「神隠しのような消えかたですからね。まったく、困っているのです」

妹背に心当たりがないといわれて、石岡は眉をひそめた。もっとも、神隠しなら自転車だけは発見されよう。妹背巡査は自転車に乗ってどこか遠くへ懸命に逃げて行ったような気がした。

「今朝から、二十人委員会が、開かれていますね」

妹背は皮肉を含んだ視線を石岡に向けた。

「ええ――」

「連中は調べたんですか」

「調べる？　連中を。いや。しかし、何か根拠がある

のですか」
「いいえ」
妹背は視線を庭に向けた。
葉鶏頭の真っ赤な群落がある。
タオルで首筋の汗を拭った。風が生ぬるかった。よどんでいる。その澱みの中に鶏や牛のむーんとする臭いがこもっていた。
「そうか。あの連中にも、一応、あたってみる必要があるかもしれん」
石岡もしきりに額と首筋の汗を拭いていた。
「わけのわからん連中です。あんなのは……」
人間ではないといいかけて、妹背は口を閉じた。いってみても、どうなるわけではなかった。
やがて、石岡警部は会釈をして出て行った。
妹背は濡れ縁に腰を下ろして、暗い視線を葉鶏頭に向けていた。白い野菊も花を開いている。血のように赤い色と白い色の周りに陽炎がゆらめいた。
失踪したという弟のことを妹背は考えていた。弟の性格は妹背がだれよりも心得ている。失踪などする男ではなかった。曲がったことがきらいだ。警察官向きの性格にできていた。責任感も強い。そして、明るい。妹背とは対照的だった。
その弟が、昨夜七時に派出所を出たきり、消息がないという。妹背にはただごととは思えなかった。
また、汗を拭いた。
その拍子に、ふと、思いついたことがあった。妹背は立って土間に入った。土間つづきに昔ながらの囲炉裏を切った食事の間がある。
梅酒の瓶が隅に置いてあった。妹背はそれをみて、流しに立った。流しの水切りにグラスが一つ伏せてあった。
――やはり、そうか。
グラスは弟が来たことを物語っていた。
妹背は昨日の午後おそく、諏訪市に出た。帰宅したのは夜の九時頃であった。食事は諏訪でして戻ったから、自宅では何も食べなかった。十時頃に、派出所か

ら、弟が行っていないかと問い合わせがあった。来ていないと答えて、眠った。その時点では、妹背は別に不安は感じなかった。いずれ帰るだろうぐらいに思っていた。

今朝は、妹背はまだ食事をしてなかった。乳牛と鶏の世話をしてから、朝食は昼前にとる習慣がついていた。したがって、食器類は何も出ていないはずであった。

弟は町の官舎に住んでいた。ときどき、やって来る。夜やってきて二人で飲むこともあれば、巡回中にちょっと寄って行くこともある。その場合、たいてい、梅酒をグラスに三分の一ほど飲む。弟の好物だった。飲んだあとは、弟はかならずグラスを洗って行く。妹背がいるときもいないときも、それは同じだった。

昨日、諏訪に出かける前にグラスが出ていなかったことは、たしかだった。妹背も几帳面な性格だった。使った食器類はすぐに洗って片づける。

——弟は、家に寄った。

妹背は、弟が洗って水切りに伏せたグラスをみつめた。グラスの硬質の肌に弟の顔が浮かんで、ニヽと笑った。よく笑う弟だった。しかし、グラスの肌に浮かんだ笑顔は、何か、わびしかった。

すぐに、消えた。

妹背は濡れ縁に戻った。

葉鶏頭をみた。みながら、整理した。妹背が昨日、家を出たのは、午後五時頃だった。鶏の飼料を買いに出たのだ。戻ったのが九時。弟はその間に来ている。

弟は七時に派出所を出ている。派出所からここまで登ってくるには自転車で約十五分かかる。そうすると、七時二十分から九時までの間となる。

——いったい、なぜ。

妹背は胸中でつぶやいた。

なぜ、弟は、家にやってきたのか。ここは町外れだ。警官の巡回区域には入らない。細い間道が戦場ガ原に通じていて、その近くに妹背家がある。戦場ガ原以外には行けない。

〈戦場ガ原――〉
声にだして、つぶやいた。
その戦場ガ原では、今朝から、二十人委員会が開かれている。
〈二十人委員会か〉
妹背は葉鶏頭をみつめていた。その葉鶏頭に毒々しい鱗粉を持った大型の蛾がとまっていた。蛾は夜行性である。昼間も飛ばないわけではないが、この熱風の停滞している日中、めずらしい。
いいようもなく、不吉な感じがした。

## 2

妹背吉成は家を出た。
昼前であった。間道を通って戦場ガ原に向かった。
夏草で覆われかけた、狭い道路だった。草は熱暑に生気を失っていた。ぐったりしている。蟬も鳴かなかった。
戦場ガ原までは妹背家から一キロほどの道程である。勾配が下り気味になっていた。途中に丘陵が幾つかある。
戦場ガ原――元治元年、水戸天狗党が筑波山に挙兵した。武田耕雲斎の率いる正義党もこれに加わった。が、やがて形勢不利となる。天狗党は京都に上って一橋慶喜に請願すべく、耕雲斎を首領として同勢千名が伊那谷を通過した。佐久に入り和田峠を越えて諏訪に出、伊那谷を飯田に抜けようというのだった。途中の諸藩は震駭した。藩内を通れば面目を保つために一戦を交えねばならず、だが、干戈を交えれば藩は焼き払われる。
伊那谷を歴史の夜明けが襲ったのである。各藩、戦戦恐々となすすべを知らなかった。小田原評定の末、ともかくも、諏訪の高島藩は武門の意地にかけてと、戦場ガ原に出兵を決定した。悲愴な覚悟であった。
だが、干戈を交えるにはいたらなかった。話し合いがついたのである。この話し合いは飯田藩でもついている。が、飯田藩ではそのために清内路の関守をして

15 狂った夏

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com